# 日本印人研究

## ――高芙蓉に関する基礎研究（Ⅰ）――

神野雄二

### 一、はじめに

江戸時代中期になると、印聖と称される高芙蓉（享保七年―天明四年、一七二二―八四）が出現する。彼により、今体の卑俗な弊風は一掃され、古体派が打ち立てられた。芙蓉の復古的刻風は門下の印人により広く流布された。京都・浪速・江戸のみならず地方にも彼の印風は波及し、明治の初めに至るまで芙蓉派は栄えた。その一派は日本篆刻史上まさに高峰をなしている。

高芙蓉没後、門人や彼を慕う人々により、さまざまな顕彰や出版が行われてきた。これは芙蓉の遺作や遺徳を長く伝えたいとの思いからであろう。中でも篆刻において初めて帝室技芸員に選出された印学の泰斗中井敬所（天保二年―明治四二年、一八三一―一九〇九）は(1)、芙蓉の資料を蒐集し、研究と顕彰に努めた。敬所は近世印人の評伝を集成すべく、名著『日本印人伝』の基と成る稿本を撰述した。東京国立博物館には、芙蓉の刻印十五顆を含む敬所旧蔵の印章・篆刻のほか、印譜・拓本・稿本・写本など多数が収蔵される。同資料中に、明治三三年に峡中日報社から発行された新聞『峡中日報』があり、「高芙蓉」に関する記事が十五回にわたり掲載されている。これには芙蓉と敬所の事蹟に関して述べられており、芙蓉研究の最も基本となる文献の一つといえよう。

その他同館には、漠南横田実旧蔵の印譜コレクションの収蔵があり、日本印人の印譜が充実しており芙蓉関係の印譜が数多く含まれている。

本研究においては、これまでの高芙蓉研究に関わる主要な先行研究を提示するとともに、その成果と今後の展望について言及するものである。

筆者は、日本における印章や印人の研究、中でも「高芙蓉とその門流の研究」を課題としている。現在その一系譜である源惟良、小俣蠖庵、福井端隠、山田寒山(2)、山田正平の印学並びに作品研究を進めている(3)。

今後中井敬所『日本印人伝』(4)、水田紀久先生の『続補日本印人伝』の増補を目指したい。篆刻の専家のみならず、他分野に渉る篆刻に関係する人物も収録したい。本稿は、その研究の一翼を担うものである。

## 二、日本における印学研究の現状

印学は、印章や篆刻を対象として、これを史的・科学的に研究する学問である。印章は古代メソポタミア文明に端を発し、東西文化圏に伝播し、欧亜大陸のほぼ全域に広まった。印章は七千年の歴史を有しており、他の文化や芸術などの諸領域との関連も深い。

印章・篆刻や印学の研究は、歴史考古学や芸術の対象としてだけではなく、文化史、書学・書道史、美学・美術史等その裨益するところは甚だ大きい。それにもかかわらず、日本における印学の研究、中でも印章や篆刻そして印人や印譜の、広い視野に立った体系的な研究は、まだ十分なされているとは言えない。昭和五十年頃は、まだ篆刻に対する理解も少なく、研究者も殆んど存在しなかった。ただ中野三敏、水田紀久、太田夢庵、荻野三七彦、神田喜一郎、小林斗盦、中田勇次郎、新関欽哉、西川寧、三村竹清などの諸先碩によるご業績は、示唆に富むもので学恩を蒙った。

日本の印章や篆刻は、考古学的・歴史学的な史的考察とともに、様式面や、形象面つまり文字文化形象面からその特質が研究されるべきであろう。今後、より広い視野にたった研究が求められよう。

## 三、高芙蓉研究に関する基礎文献

高芙蓉研究を進めるにあたって、基本的な文献を幾つかの項目に分けて掲げる。遺漏もあろうかと思われるが、今後随時増補していきたい。尚、高芙蓉の刻印、印籍、書画作品の所蔵に関しては、以前取り上げたので、ここでは略す(5)。

尚、文献の配列は、(1)・(2)は、著者順別、他は刊行年順とした。

(1) 単行本

- 市島春城『市島春城古書談叢』(青裳堂書店、一九七八年八月)
- 大谷光男著『研究史金印』(吉川弘文館、一九七四年七月)
- 大谷光男編著『金印研究論文集成』(新人物往来社、一九九四年三月)
- 岡本椿處著『私の篆刻道』(一莖書房、一九七九年一〇月)
- 小川善明著『京都名墓探訪』②(ナカニシヤ出版、一九九六年九月)
- 久米雅雄著『日本印章史の研究』(雄山閣、二〇〇四年七月)
- 後藤慈二編『邦人印譜』(青裳堂書店、二〇〇二年五月)
- 神野雄二著『高芙蓉の篆刻』(木耳社、一九八八年六月)
- 菅沼貞三著『池大雅』(『人と芸術』(二玄社、一九七七年六月)
- 杉本つとむ編『漢篆千字文』(『異体字研究資料集成』二期第五巻、雄山閣出版、一九九五年十二月)
- 高畑常信編著『日本の遊印』(木耳社、一九八三年十月)
- 鄭麗芸著『文人池大雅研究―中国文人詩書画「三絶」の日本的受容―』(白帝社、一九九七年二月)
- 寺田貞次著『京都名家墳墓録』上巻(『風俗叢書第四輯』山本文華堂、一九二二年十月)
- 中田勇次郎編『日本の篆刻』(二玄社、一九六六年十一月)
- 中田勇次郎著『中田勇次郎著作集』第十巻(二玄社、一九八七年四月)
- 中西慶爾著『餘延年伝』(木耳社、一九八八年四月)
- 中野三敏、菊竹淳一共編『相見香雨集二』(青裳堂書店、一九八六年九月)
- 中村真一郎著『蠣崎波響の生涯』(新潮社、一九八九年十月)
- 新関欽哉著『東西印章史』(東京堂出版、一九九五年六月)
- 西川寧主幹『書品』第二八号(東洋書道協会、一九五二年五月)
- 三浦佑之著『金印偽造事件「漢委奴国王」のまぼろし』(幻冬社、二〇〇六年十一月)
- 水田紀久編『蕉園堂日記　翻刻編』(蕉園堂日記刊行会、一九七二年四月)
- 水田紀久著『日本篆刻史論考』(青裳堂書店、一九八五年一月)
- 水田紀久注『葛子琴　中島棕隠』(岩波書店、一九九三年三月)
- 水田紀久著『郷友集』(近代文芸社、一九九六年三月)
- 水野恵著『日本篆刻物語はんこの文化史』(芸艸堂、二〇〇二年三月)
- 三村清三郎著『三村竹清集』四、五(青裳堂書店、一九八三年五月)
- 村上黎昭著『韓天寿』(綜芸社、一九九一年十一月)
- 森銑三著『森銑三著作集』第三、四、十、十二、別巻(中央公論社、一九七

一年一、八、九、十一月、一九七二年八月）
・結城素明著『芸文家墓所誌　東京美術家墓所誌続篇』（学風書院、一九五二年）
・湯浅邦弘著『懐徳堂の印章』（大阪大学文学研究科、二〇〇七年三月）
・横田実著『漢南書庫　中国印譜解題』（二玄社、一九七六年一月）
・吉木文平著『印章綜説』（技報堂、一九七一年四月）
・米田彌太郎著『近世日本書道史論攷』（柳原書店、一九九一年一月）
・米田彌太郎著『近世書人の表現と精神―続近世日本書道史論攷―』（柳原書店、一九九九年七月）

## （2）論文

・相見香雨「高芙蓉と来禽（上）・（中）・（下）」（『南画研究』通巻第一八号・一九号・二十号、中央公論美術出版、一九五八年八・九・十月）
・安藤更生「『漢委奴国王』の金印―高芙蓉偽作説を否定する―」（『中国美術雑考』、二玄社、一九六九年七月）
・伊藤滋「―水木コレクション―高芙蓉遺印十四方について」（『墨』通巻一七七号、芸術新聞社、二〇〇五年十二月）
・岡村梅軒「篆刻と印人伝」（『書道及画道』第一巻第三号、書道及画道社、一九一六年十二月）
・岡本岱「私説日本篆刻物語」其の三（『太平台春秋』第十号、二〇〇三年二月）
・小川直紀「印譜について（当館所蔵を中心としての考察）」（『三重県立図書館紀要』五号、三重県立図書館、一九九九年三月）
・小原俊樹「印聖高芙蓉刻印の検討」（『福岡教育大学紀要』第五十号、福岡教育大学、二〇〇一年二月）
・茅原東学「関東訪碑記（八）芙蓉大島先生墓表と故東山画隠大雅池君墓表」（『書苑』九巻第八号、法書会、一九一九年二月）
・冠豊一「芙蓉派の一系統について（上）―葛子琴とその後継者―」（『書品』一六三号、東洋書道協会、一九六五年八月）
・冠豊一「芙蓉派の一系統について（下）―葛子琴とその後継者―」（『書品』一六六号、東洋書道協会、一九六五年十二月）
・神田喜一郎「芙蓉山房私印譜」（『書苑』第一巻第二号、三省堂、一九三七年四月）
・欽堂居士「高芙蓉の王畿瀑図に付きて」（『書苑』七巻第四号、法書会、一九一五年）
・工藤愚厂「仏縁」（『仏教書道』六月号、仏教書道社、一九六五年六月）
・幸田成友「高芙蓉所用の印について」（『書誌学の話』、青裳堂書店、一九七九年六月）
・薫風「篆刻家の足跡高芙蓉の朱文印」（『金石書学』第三号、芸文書院、二〇〇〇年十二月）
・小笹喜三「大雅堂帖屑」（『南画研究』第二巻第十二号）
・小林斗盦「逝世二百年高芙蓉記念展」（『書道芸術』通巻第十六号、日本美術出版、一九八五年七月）
・小林斗盦「河井荃廬先生五十年祭」にあたって（『書道界』「河井荃廬先生五十年祭」開く、日本美術出版、一九九五年五月）
・神野雄二「高芙蓉の顕彰と墓碑について」（『全国大学書道学会研究紀要』、全国大学書道学会、一九八八年一月）
・神野雄二「高芙蓉」（『書道基本用語詞典』中教出版株式会社、一九九一年十月）
・神野雄二「市島春城の印章（上）」（『修美』通巻四四号、修美社、一九九三年十月）
・神野雄二「市島春城の印章（下）」（『修美』通巻四五号、修美社、一九九四年一月）
・神野雄二「富岡鉄斎研究―園田湖城宛書簡―」（『修美』通巻四八号、修美社、一九九四年十月）
・神野雄二「高芙蓉の印学―印譜と著述―」（『全国大学書道学会研究収録』、全国大学書道学会、二〇〇四年十月）
・神野雄二「江戸期の篆刻」「高芙蓉」（『日本・中国・朝鮮／書道史年表事典』、書学書道史学会編、萱原書房、二〇〇五年十月）
・神野雄二「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿―」（『国語国文研究と教育』第四三号、熊本大学教育学部国文学会、二〇〇六年二月）
・菅沼貞三「大雅の「三岳紀行」三老遊境想像するにたえたり」（『墨』第六十号、芸術新聞社、一九八六年五月）
・須羽水雅「高芙蓉百七十年忌について」（『書品』第四二号、東洋書道協会、一九五三年九月）
・鶴田一雄「近代篆刻史を俯瞰した日本の篆刻展」（『墨』、芸術新聞社、一九九一年十二月）
・桃四河『坐臥記』（『続日本随筆大成』一、森銑三・北川博邦編、吉川弘文館、一九七九年六月）
・中田勇次郎「江戸時代の篆刻」（『書道全集』第二三巻、平凡社、一九六六年

十一月）
・永田英樹「高芙蓉・出身地「甲斐高梨」について」（『封山通信』第十六号、封山印会二〇〇一年八月）
・中西慶爾「印人・餘延年」（『書品』第一九二号、東洋書道協会、一九六八年五月）
・中西慶爾「書人国散策《四七》さまよう高芙蓉碑」（『墨』四七号、芸術新聞社、一九八四年三月）
・中野三敏「蔵書目その九　邦人印譜　その一」（『文献探求』第十二号、文献探求の会、九州大学文学部国語学国文学研究室内、一九八三年七月）
・中野三敏「蔵書目その十　邦人印譜　その二」（『文献探求』第十四号、文献探求の会、一九八四年六月）
・中野三敏「芙蓉房座右図目録」（水田紀久著『日本篆刻史論考』、青裳堂書店、一九八五年一月）
・中野三敏「都市文化の成熟」（『十八世紀の江戸文芸』、岩波書店、一九九九年一月）
・新関欣哉「糸印の謎をさぐる」（『謎の糸印』富岡美術館、一九九三年九月）
・西川寧「天明期の印学」（『書品』第二八号、東洋書道協会、一九五二年五月）
・服部畊石「高芙蓉百五十年祭に際して」（『書芸』四―一、一九一四年）
・梅舒適「高芙蓉のことども」（『書品』第四二号、東洋書道協会、一九五三年九月）
・老梅「高芙蓉伝、並びにその作品について」「芙蓉軒私印譜について」（『篆美』高芙蓉特集、一〇二、篆社、刊行年不詳）
・藤原楚水「書道の今昔（六）―三岳道人―」（『書学』通巻三七九号、日本書道教育学会、一九八一年十月）
・細川潤次郎「高芙蓉伝」（『書苑』第一巻第二号、三省堂、一九三七年四月）
・松下英麿「高芙蓉篆記―「池大雅の周辺」の一―」（『南画研究』通巻第十七号、中央公論美術出版、一九五八年七月）
・松下英麿「高芙蓉篆記（承前）・細合半斎―「池大雅の周辺」の二―」（『南画研究』通巻第十八号、中央公論美術出版、一九五八年八月）
・水田紀久「杜俊民著篆刻随筆『印道諸家確論』」（『文芸論叢』第三二号、大谷大学文芸学会、一九八九年三月）
・水田紀久「木村蒹葭堂に贈る葛子琴の長律一首」（大阪市史紀要『大阪の歴史』第三二号、大阪市役所行政局市史編集室編、一九九一年三月）
・守屋正彦「柳沢淇園と高芙蓉」（『市史編さんだより』第二号、甲府市市史編さん委員会、一九八四年八月）
・守屋正彦「高芙蓉における絵画的側面と出自に関する若干の考察」（『甲府市史研究』第三号、甲府市市史編さん委員会、一九八六年）
・八木奘三郎「日本の篆刻　附高芙蓉の事」（『絵画叢誌』二八〇、絵画叢誌部、一九一〇年）

### (3) 図録

・『日本・中国の印譜』（東京国立博物館、一九七七年十二月）
・小林斗盦編『逝世二百年高芙蓉記念展図録』（日本篆刻作家展事務局、一九八五年四月）
・小林斗盦編『高芙蓉河井荃廬両先生塋域完成記念冊』（尚友会、一九八九年十月）
・『高芙蓉展』（篆刻美術館、一九九一年三月）
・『近世の肖像画展』福井尚寿「高芙蓉像」（佐賀県美術館、一九九一年十月）
・木部克己編『高山彦九郎の実像』（あさを社、一九九三年六月）
・『没後二百年特別展　秦房藷コレクション―江戸時代の文人―韓天寿の絵と書』（富山美術館、一九九五年七月）
・『木村蒹葭堂―なにわ知の巨人―』（大阪歴史博物館、二〇〇三年一月）

### (4) 目録・事典

・『東洋美術文献目録』（東京国立文化財研究所（美術研究所）、柏林社書店、一九四一年十二月）
・『大谷大学図書館蔵禿庵文庫』（大谷瑩誠氏旧蔵本）目録（大谷大学図書館、一九五〇年四月）
・『大東急記念文庫』（大東急記念文庫、一九五五年八月）
・『東京都立日比谷図書館蔵加賀文庫目録』（東京都立日比谷図書館編集・発行、一九六一年四月）
・『山梨県立図書館所蔵　甲州文庫目録』上（山梨県立図書館発行、一九六四年十二月）
・『日本東洋古美術文献目録』（東京国立文化財研究所美術部（美術研究所）、東京国立文化財研究所、一九六九年三月）
・『大阪府立図書館蔵書目録　和漢書第十三巻』（大阪府立図書館、一九七一年三月）
・『山梨県立図書館所蔵　甲州文庫目録』下（山梨県立図書館発行、一九七一年十二月）

・『日本人物文獣目録』（法政大学文学部史学研究室編、平凡社、一九七四年六月）
・『東京国立博物館収蔵品目録』（東京国立博物館、一九七六年三月）
・『日本人名大事典』（新撰大人名辞典の改題）第六巻覆刻版（平凡社、一九七九年七月）
・『二松学舎大学附属図書館和書目録』（二松学舎大学附属図書館、一九八五年四月）

（5）新聞

・「高芙蓉一十五回『峡中日報』（峡中日報社、一九〇〇年六月九日～八月十一日）
・『明治・大正期山田寒山関連新聞資料』（山田家蔵、明治・大正期）
・内藤香石「高芙蓉の話」（『東亜書道新聞』、一九三八年九月二五日）
・「天徳寺（東京虎ノ門）、篆刻界の聖地に」（『書道美術新聞』第二六五号、美術新聞社、一九八九年十月四日）
・「印聖高芙蓉展ひらく」（『書道美術新聞』第三六四号、美術新聞社、一九九一年十一月一日）
・「河井荃廬五〇年祭」（『書道美術新聞』第五〇九号、美術新聞社、一九九五年四月十一日）
・「高芙蓉・河井荃廬両先生追悼会ならびに墓碑由来記の除幕式」（『書道美術新聞』第八六五号、美術新聞社、二〇〇七年三月十五日）
・「高芙蓉・河井荃廬墓石縁起」（『書道ジャーナル』No・404、書道ジャーナル研究所、二〇〇七年五月一日）
・大野修作「『書学を学ぶ人のために』第七五回、「懐徳堂」の印章―葛子琴を中心に―」（『書道美術新聞』第八七一号、美術新聞社、二〇〇七年六月十五日）
・大野修作「『書学を学ぶ人のために』第七九回、東皐心越と『韻府古篆彙選』―江戸時代の篆刻―」（『書道美術新聞』第八七五号、美術新聞社、二〇〇七年八月十五日・九月一日合併号）

（6）その他

・中井敬所著『日本印人伝』（非売品、一九一五年九月）
・余延年著『風塵随筆』（石田元季『江戸時代文学考説』中西書房、一九二八年）
・『高山彦九郎全集』第一巻―第四巻（高山彦九郎先生遺徳顕彰会〈一巻〉、高山彦九郎先生遺稿刊行会〈二―四巻〉、博文館、一九四三・五二・五三・五四年）
・芳賀登他編『日本人物情報体系』第六一巻（皓星社、二〇〇一年一月）
・『定本書道全集』別巻印譜篇（河出書房、一九五六年五月）
・『書道全集』別巻Ⅱ（平凡社、一九六八年十二月）
・西川寧編『書道講座』6篆刻（二玄社、一九七三年二月）
・小林斗盦編『篆刻全集』一〇日本（二玄社、二〇〇二年一月）
・相良亨他編『近世儒家文集集成』（ぺりかん社、一九八五年）
・中井敬所『芙蓉先生遺芳録』（東京国立博物館所蔵、一八九一年一月・一九〇〇年六月・一九〇四年十一月）
・中井敬所『皇朝印人伝原稿』（東京国立博物館所蔵、一九〇四年十一月）
・『高芙蓉刻恵南楼印譜』（『書誌学月報』第四一号、青裳堂書店、一九九一年二月）
・頓春水『在津紀事』（多治比郁夫・中野三敏校注『新日本古典文学大系』九七、岩波書店、二〇〇〇年五月）
・大典顕常『北禅文草』三之巻
・『先哲叢談続編』巻一〇
・『平安人物誌』明和五年版

## 四、高芙蓉研究の現状と課題

現在高芙蓉研究は、今だ資料を集成する段階であり、それほど進んでいないのが現状である。作品もそれぞれの諸機関や個人の所蔵で、作品集は刊行されていない。高芙蓉の先行研究では、水田紀久先生の『日本篆刻史論考』（青裳堂、一九八五年）が最も纏まったものである。芙蓉研究はこれを基に今後進めていかねばならない。研究は大きく分けて、伝記・芸術（書・画・篆刻）・思想・学問などが挙げられよう。これらの個別研究とともに、資料が限られる現在、彼の知友・門弟との関連にも目を向ける必要があろう。木村蒹葭堂・皆川淇園・柴野栗山・高山彦九郎・池大雅・韓天寿・藤貞幹等との交友である。また芙蓉の詩文の収集、芙蓉筆による墓碑銘の収集なども大切である。篆刻や印譜もその真贋を含めて調査されなければなるまい。

このように芙蓉研究は、いまだ初期段階といえる。

## 五、『峡中日報』掲載「高芙蓉」について

高芙蓉を研究するにあたり、峡中日報社刊行の新聞『峡中日報』に掲載された「高芙蓉」は一級の資料と言える。同資料の内容を紹介し、その重要性に言及しておく。これは、関蕉雨や中井敬所の資料提供に基づく記事であり、芙蓉の事蹟、中井敬所の事跡などについて述べられている。芙蓉の伝記の欠を補えるものであり、敬所の高芙蓉研究の一端を示している。高芙蓉研究にとってかけがいのない資料といえる。

凡例

一、『峡中日報』は、新聞が古く劣化しており不鮮明であるため、山梨県立図書館所蔵と東京国立博物館所蔵の両新聞を採用した。
一、漢字は原則として現時通用の字体を用いた。
一、平仮名は現行の表記に対応する平仮名に統一した。
一、仮名遣いは、原則として原文のままとした。
一、明らかな誤字・脱字・衍字も基本的にはそのままの形とした。
一、判読しがたい箇所は、□で示した。

① 「高芙蓉（一）」 明治三十三年六月九日

三菊道人の処で関蕉爾氏に逢ふたわれは蕉爾氏と数年逢はなかつた、その筈である、氏は三年以前に其居を甲府から東京に転じ今は神田の今小路に住んで居ると云ふのだ、随分久闊であつた、くさ〳〵の咄も湧き出た、中で氏が得意とせる篆刻談に移つた、頓て篆刻家の批評にも及んだ、甲州も此一家だけは古往今来、有名の人物が続出して居る、見られよ、第一が高芙蓉、それから高田緑雲、これは甲州人ではないが久しく市川大門村に居られた縁故がある人だ、中井敬所などは当今の名家である、あの中村蘭臺も甲州には深い因縁のある人である、他の社会では甲州の人物と云ふものが碌々聞えないが、此道計りは鼻を高める値打も十分あるようだ、高芙蓉と云へば甲州人だと云ふが、就れの出身か分らぬが、墓碣には高梨の人と書てある、これは山梨の人の間違であろうが、其技術の古今独歩なることは云はずものことだ、それで却々の勉強家と見えて、今伝はる所の所謂石室金匱の秘はあまねく捜しくわしく究めて、悉く模写してある、これは驚くべきものである、詳しき経歴は知らぬが、其墓碣の石摺と応挙の画ける肖像とを蔵□るかからこれを送ろう、其墓は小石川白山社附近とのことだ、越えて一日、蕉爾氏は約束を履んで、右の二品の写を送り届けてくれた、其墓碣文は左の如くである、

芙蓉生者、名孟彪。字孺皮。姓大島。甲斐高梨人。其先為上毛新田氏之族。有故数易姓名。而芙蓉之号、始終不更。海内莫不識、而称以芙蓉焉。為人敏亮有才。嘗従坊城菅公、習典故朝儀之学。尤耽雅好、愛書画。凡石室金匱之秘、名蹟碑記之類、旁捜而委究。博物強記、蓋無比也。以故、風流人士、慕而帰之、資其聞識、利其鑒定。其名価藉藉海内云。至於篆刻之妙絶于古今、固不待諭。海内皆競乞而珍焉。王父某仕水戸義公、司庫蔵。坐事免職。去而居甲之高梨。父尤軒業徳本氏之医。而生不好医、弱冠遊京師、遂至成名。天明癸卯、宍戸侯聞生名、而聘之。乃水戸別封也。生適感祖先所由而応之。甲辰三月、挈妻子来江戸、俄罹疾。裁就藩邸、数日而歿。実天明四年甲辰四月二十四日也。年六十三。葬于小石河之無量院云。侯家悲其意、特為帰賵以襄葬事、視上士之例。妻奥田氏、一女年十三、一男久吾、甫六歳。此其瑩穴可知也。門人橘茂香羅相為謀、立碣表焉。因謁余銘之。余与生相識二十年。以周旋剋無暇、久不相面、終至永訣。聞其溘逝、為之惻惻痛心。既又感茂香之誼厚也。雖周旋官剋殫謝筆研之請、其於斯挙也、安能恝然。略叙其状、系之銘曰、

懐故土兮。志不遂。裁登仕兮。身載墜。嗟夫石之小兮。爾勒者千百幾。石之大兮。胡為乎独勒爾。

天明六年丙午四月。淡海竺常撰、韓天寿書、橘茂香建并刻、題字、稲毛直道集池無名書。

（むざん生）

② 「高芙蓉（二）」 明治三十三年六月十三日

蕉爾氏が高芙蓉の墓碣摺と肖像画との写を送り届けられた時、左の如き追て書があつた。

此肖像画は先年京都の画工富田鉄斎より木仙園主人に寄せられたものに候、それを同氏が小生に贈られた品にこれあり候原因は応挙画伯にして鉄斎が模したるものにて即ち高芙蓉当年の写真と存じ候、但原先生の原は源の字と思はれ

候、芙蓉は常に源孟彪と歃し居れたるが故に御座候、
文雅優遊不知老至貧富得喪
未介于意博方之余鉄無比
秦璽漠章二方抑止
芙蓉原先生像賀
杜弟原元凱拝撰

芙蓉は至て支那好きの人のよしに聞ゐて居た、成程此肖像画で見れば支那服を付けて居る、どれ一番白山附近の墓に参りてみよう?、ナニ、二里半計りあると、それは遠いが片道車の便を借りたら左程訳もあるまい、そこで蓮生、濤生を連れ立ちた、新橋から眼鏡まで鉄道馬車に乗つた、それから茗渓縁をば人力にて富坂まで進んだ、これより徒歩と出掛けた、予て白山社附近との事を聞て居たから、伝通院の前を過ぎりて表町へ出で、一直線に白山御殿町に馳け抜けて、直様交番所で無量院を尋ねて見たが、あたしは新参で分らぬ、どれこの辺の車夫に聴てみて上げよう、態々聴てくれても分らぬ、帳面、地図などを取拡げて見てくれても分らぬ、然らば自ら此辺を捜してみましようとて白山社の裏手へ回はつた、アチコチ彷徨て見た、盲唖院前から指ヶ谷町あたりまで隈なく見届けたが更らに分らぬ、止むを得ない、跡戻りをした、恰ど老人が向ふから来た、聴は一時の恥だ、兎に角尋ねてみよう、この辺にかく〳〵と云ふ寺がありますか、ハアー、あの交番所の処から左に折れ一二丁でよく聴てみなされとの事だ、あり難うと礼云ふてその通り遊つて見た、五六間で左に折れて四五軒先の左の寺がそうだんべいと教えてくれた人があつた、行て見たが案外だ、ウソで群雲寺とか云ふ寺であつた、これは困つた、無量院はないのかしらん、其中に蓮生は疲れたと見えて、もうよそうと云ふ、濤生もこれに同意らしい、なにそんな意気地なしでどうするものか、此のような時の奮発が肝腎だ傍の車夫に尋ねて見た、どうもそないの寺は聞かんが、此前十五六町行つた処にも一ヶ所寺があるそれか知らん、コーと外には跡へ戻りて左へ五六町行つた処に墓があるから、大方其辺に寺もあるか知らんと教えてくれた、それでは近い処へと其方へ向ひてみようと決して進んだ、果して墓は在つた、がそこに在家らしい造りの門構がある、これではないと思ひつゝ門標を仰ぎ見ればアニ図らんやだ、これが今まで捜しに捜したその無量院であつた、蓮生も濤生もアハーこれがその無量院か、どれ直ぐと墓所を一覧してみよう、したが沢山な墓だ、あれかこれかと又候穿索を始めた、が知れない又かと二生はハヤ落胆した。

（むざん生）

③「高芙蓉（三）」 明治三十三年六月十四日

俗家らしいが門標が説明してあるから寺に違ないとして門からずいと玄関口まで進んで頼まうと口を掛けた、すると納所サンらしい人が出て来て、住持は不在だが何用かと云はれた、さては寺であつたか、当寺に高芙蓉と云ふ人の墓がある筈だがそれを教えて貰いたいのだと問ふた、いえ聞きませんな、小野の小町の燈籠はありますが・・・、それでもとて、庫裡の方に引取つた、大黒らしき人に相談して見たようだ、折々池の端の方から先生の墓だと云ふて参るものがあるがそれかも知らん、それではこちらへ来ませと云ふ、墓より墓の間を通り抜けて、これではござんせんかと指さゝれて、あゝこれか、これであつた、門の左、僅か五六間バカ離れた三面杉岩の中に埋もれてある、只ツた今がた、此辺は幾回ともなく、行きつ戻りつした処だ、それでチヨツとも眼が附かなかッた、一拝して焉んぞ、名家の跡を憶はざらんやの感が起つた、慥か墓碣は北面らしい、苔蒸せる弧影が蕭然生籠に取り囲まれて居る、それだから中々見附かり悪くいと云ふのだ、如何に其墓所の狭くるしいかは謂はでも分るであろう、墓碣は長け三尺五六寸、横一尺計り、角石にて墓頂は円平形である、表面題字の処は凹めて平げてある、それに他無名の筆で、芙蓉大嶋先生墓と題してある、他の三方は即ち天寿書、茂喬刻の笠常撰文が鏤ってあるのだ、見れば、この刻み方が比類ないものだ、正に茂喬が利刀によりて其文字を刻んだものである、兎に角世に珍らしい墓碣だ、撰者と云ひ、筆者と云ひ、刻者と云ひ、みな名家の腕揃である、かくも三足揃ふたものを見たことは稀れである、いな、こないなものは世間またと其類が見られんかも知れんのだ、台石は自然石で、方二尺、高一尺四五寸のものである、これにも表に何か彫つてある、其文はこうである、

橘茂喬、嘗造此芙蓉大島先生墓碣。有故而不得立。懼火災、埋諸地下有年矣。終不遂其志而歿。今茲、其子参与直道相謀、将継其志焉。偶得羽倉君之助、而此挙成矣。君名潮。字太冲。性典雅、最耽図書、欽慕先生者深矣。因及於此。
文化壬甲十月。讃岐稲毛直道識。男三千書。

それで左右両面にも何か書てあるらしい、が杉籬が生え冠つて居つて分らぬ、先づ左隣の墓地に這り、杉の間合から窺いた、それで少しは分つて来た、
先生与池無名・韓天寿、有兄弟之交。其遊名山、探霊蹤、必三人相携而共行焉。因三人同号曰三岳道者。無名先生先没、天寿尚存。而書此墓碣。今広就無名之書掇集、以作題字。盖追成其志尓。

稲毛直道再識。

右の方を調べようとすれば、杉籬の外、蜘蛛の巣が一杯に掛りきつて居る、止むを得ぬから、二生に相談して寺から竹箒と切物とを借りて来た、それで以て巣かけを払ひ除け、根枝を切り取つた、それでやつと所々見透くようになつた、それから蹟の墓石に寄り掛つて覗きつゝ、書き取つた、其文は即ち左の如くだ。

此碣刻成。而不得建者、殆三十年。今偶然成矣。顧先生遺德、益顕之時也。余深感之、及謀寺主、而約永世不可改移之言、遂鏤以為徴云。

羽倉潮識

（むざん生）

④「高芙蓉（四）」明治三十三年六月十七日

二生とも〳〵墓前を掃き清めて草花一束を手向けた、納所サンには布施を出して一遍の回向を頼んだ、すると「あなた」は誰れかと問はれた、われは先生と同国のものだと答へた、姓名はとの事で一枚の名刺を取上げられた、見れば此寺は伝通院の裏手に当つて居る、昔は伝通院の墓地とここの墓地とが接続して居たらしい、戸崎町の内であつて、巳前は随分大寺らしい、が今はいろ〳〵の諸会社から追々と其境内を蚕食されたようだ、立木も疎らであつて、古墓などが処々に散されて居る、それで寺は余程広大のものであつたろう、それが焼失したのか、吹潰されたのか、今の態裁は少しも寺方とは見えぬ、チヨツとした屋敷風である、宗旨は禅宗らしい、墓の戒名を読んでそう思はれたのだ、改めて納所サンに頼んだ、コウ頼んだ、この台石にも記した通り、可亭の注文の如くにこの墓碣は永世処換えをせぬ約定を違反せずに履行することを忘却せぬよう、これを住持サンに伝へて貰いたいのだ、それから二生を率ゐて帰途に就た、宿に戻つたら凡そ六時間計り費した勘定であつた、これも六月五日のことであつた。」嘗て辻蘆德翁から芙蓉のことを聞いたことがあつた、それで始めて其人物をも知り得たのだ、兎に角稀代の人であると云ふことをも知りて居た、当時の芙蓉の交遊は孰れも大家揃であつたようだ、友を見て其人を知るとは古から云ふたことだ、中にも三岳道者はこの台石にも記した如くである、ここで此墓碣に関係の人々に就て一寸書いて置こう、池無名は人も知る画伯の大雅堂である、此人は一たび足を甲州にも入れたそうだ、泉町辺の看板を書かれたことがあつて、これをば今も木仙円主が所蔵して居ると云ふ、これも蘆德翁から聞いて居た咄である、韓天寿と云へば、二王に倣ふて鬱然一家を成し上げた書家の酔晋斎で、大年と云ふ名がよく世間に通りて居る、この人達が既に兄弟の交を結んで居たとすれば、芙蓉は定めて如何な人物なりしかは、其一班を窺ふことが出来るであらう、さて淡海竺常の如きも極の知人で、其間柄も余程親密らしい、竺常は即ち大典で、相国寺の住持である、学者で高名の坊サンであつた、かの橘茂香はこれがそれ初祖の蔵六である、篆刻家では謂わずと芙蓉系で、その高足で、中々有名のものであつた、此弟子を得て其師匠の蘊蓄はどうであつたろうと直ぐ想望されるのだ、稲毛直道は柴野栗山と同郷人で、其地の栗屋山の名を分けてこれも其号を屋山と呼んだ人だ、芙蓉晩年の門人で其道には達人であつたそうだ、羽倉潮は可亭と号して随分奇行の多い篆刻家である、橘参はこれが二代の蔵六で、実は初代の甥であるそうな。

（むざん生）

⑤「高芙蓉（五）」明治三十三年六月二十七日

処でこう云ふ疑問が起つた、台石に記した蔵六刻で地下に埋め居た墓碣は果して現今のこの墓碣か如何んと云ふことだ、何ぜなれば

（一）蔵六の墓碣は題字を記す丈け表面を遺し置きし乎

（二）蔵六が建墓の時直道もこれに共力して大雅堂の書を　綴集せし乎

（一）建立し得ぬ訳柄は知らぬが、若し資力にでも乏しかつたならば、現今の墓碣建立費は直道輩が可亭の助力を要する程の必要もなかろう、これから考ふれば、他に立派の墓碣があるかやの疑問が起る、それに三面に碣文を刻んで、表面丈け遺し置くことのあるべき筈はないのだ、墓石にも造此芙蓉大島先生墓碣とあり、又此碣刻成とあるに照らしてもそう思はれるのだ、（二）左なくば、直道は蔵六が計画の時に共力して奔走したものであろうか、墓碣右面の撰者、筆者、刻者の次に、題字稲毛直道集、池無名書とあるに見ても、かく測らるゝが、台石の今広然無名之書云々を読めば、建墓の当時に於て綴集して刻んだようでもある、どうも少しく解決し兼ぬる、それで蕉雨氏の居を尋ねて問ふて見た、（一）蔵六は墓碣の表面丈けを遺し置たものだろうと答へられた、最初墓碣の石摺を見た時、碣文と題字、稲毛直道集、池無名書の十一字は一目判然と其彫刻方が相違して居たことを認めた、何ぜかくの相違があるかと疑ふて居た今これが墓碣の刻面に顕はれて居るのだ、友人所蔵の碣文は法帖に成つて居る、それで、二者の区分は一層判然と画して見らるゝ、此疑問で余の疑問は殆んど解けたようだと云ふ、だか、これは一己の考のみだ、特に此実地を知つて居るものは、今、中井敬所翁のみだ、然らば翁の許を訪ふて其疑問を解決して貰はふ、これから同行しようとの事で蕉雨氏と打連れて出掛けた、翁の居は、下谷池の端だと云ふ、成程無霊院の大黒が云ふたことに照らし合はせて、時々の展

墓者は即ち翁であると云ふことが分かつた、蕉雨氏も云ふた、正しく芙蓉の流を酌んで居るは此翁である、恐く翁は蔵六の名目を承け襲ひて居るのだろう、それで芙蓉の祭は此翁がするのだらう、頓て足は池の端に着いて、番地を知らぬ、交番所の厄介で、やつと、茅町二丁目七番地と云ふことが分つて、訪ふたが、留守らしい、果して下婢らしきものが出て先生は今朝がた出掛けたまゝと云ふ。

（むざん生）

⑥「高芙蓉（六）」　明治三十三年六月三十日

四五日たつて十日の日曜に、朝早く蕉雨氏を尋ねて中井翁の許に同行した、刺を通ずれば、折りよく翁は在宅で、直ぐこちらえと案内せられた、先づ初対面の辞儀をした、見受くる処、翁は却々の高齢で、銀の如き真白く長き髯を貯へられた立派の方である追々と甲州のことに就て話かけられた、諸事丁寧で、われ〳〵後進のものに向つても凡て謙徳を守られて、温乎の如く見える、唯親切を盲として仔細に綿密に説き示されたから、覚えず惚身にありがたみを感じた

わしは甲州の生まれではござらぬが、父君が御国の南湖村に生れた縁故がありますから年々歳々御国へは参ります、一度から二度位は参りましたが、今年は春来眼を煩ふた為め参りませぬ、南湖は、ハァー、安藤の処です、甲州へ参れば松亭へ泊ります、頓て話しは本文にと立ち入つた、芙蓉先生の事をお尋ねに参ッたのですと云へば、翁は大悦びの体で、それは篤志の事です、わしも種々先生の事は取調へて置きましたから知り得て居る限りはお答へを致しましょうと云はれた、それで直ぐ疑問の点を尋ねた成程この疑問は当然ですそう思ひなさるも無理はないです、こういう訳があつたのです、最初墓碣の題字は

△蔵公が小篆を揮ふて刻んだと見えます其当時墓碣文と共に題字を石摺にしたのがあります、わしの処にもありました、それを屋山等が無量院え建てる時になつて、篆字は読め苦いと云ふ事と、三岳道者の関係もあれば、これに池無名の書を加へるのは三岳道者の意志にも叶ふだろうとの考へと見え、それで深く△墓碣の表面を削り取つて、これに池無名の書を刻んだ、それで最初墓碣は表面が平らであつたのだ、勿論現在の墓碣は当時蔵公刻のものに相違ない、此事を台石に記しておいたらならよかろうに、これがないからこのような疑問が起りますのです、はてさてお説で疑問は悉く氷解しました、それでは

△三十年間不徳立訳けはどうです、これですか、これはこうです、事体、無量院は旗本衆の菩提寺であつて、新規に墓地を立つることが出来ぬ仕来りがあつたそうです先生の遺言で遺骨は当時無量院へ埋めたには違ないが、この慣行があるので墓碣丈けが立られずに居た、これを羽倉可亭の尽力に依りて、やつと墓地の上に墓碣を立つることになつたのだ、此間は蔵六が日本浜町の屋敷内に埋めて居たのだ、先生は

△無量院の住持と非常に懇親をして居たらしい、それで死後は此寺へ葬れとの遺言をしたとのことだ、此寺も当時は随分大伽藍であつたそうだ、わしが先生の百年祭を行ふた時までは、本堂がありましたが、其旦家と云ふものが悉く旗本衆計りであつたから、此旗本衆が退転後は寺の所得は随て皆無となつた為め、それで寺の維持が立たなくなつて、本堂は売払ふ始末となつて仕舞ふた、今は住職も兼住となつて居るのだ時に正午にも近かろうとした、が翁には特に酒を呼んで馳走された、今日は向島へ参ろうとしたが少し障ることがあつて行かなかつた、恰どよい幸であつたと、頻りと酒を勧められた、折角のことではござるが下戸で、それでは蕎麦をやりなさい、これは此辺でなうての運玉でござる、此間にも芙蓉のことは先生〳〵とて諄々と説き示された。

（むざん生）

⑦「高芙蓉（七）」　明治三十三年七月一日

△墓誌銘この墓碣の外に、尚墓誌銘があつたように思はれる、それは先生が存生中こしらえさせたものかも知れぬ、又それを葬式の時に墳墓の中へ埋めたものかはたしかに分らぬが、水戸の赤水の門人に木村と云ふ儒者があつた、その人の内にこの墓誌銘の草稿があつたそうで捜し出したとか、して見ればこの文はこの人の手に成つたのか知らんが、この草稿は今信濃の小県郡小県村大字本海野矢嶋行康の所蔵であるそうだ、其文は写して置たらご覧なさい、

故芙蓉先生大嶋君墓誌銘

君諱孟彪、字孺皮、号芙蓉、称逸記、後更名宇作、甞有故假称近藤斉宮、其先上毛新田氏族大島讃岐守源守之之裔也、祖庄右衛門君者、事水藩義公、為土蔵番、坐盜夜破庫鎖、免職、流落甲之高梨、父尤軒業医、所□徳本流也、君不好医、弱冠遊京師、入坊城家之門、専習記□掌故、研遍通、性有好古癖、凡名山、石室、金匱、帳中之秘、真不旁搜遠索焉、博物強記、能職書画真贋、京坂之人、皆待其鑑定而論価、尤善篆書印章、鉄筆之技、為天下賞、為人質直寡欲、楽貧耽学、有古逸士之風、天明癸卯秋、蒙宍戸儀之召、宍戸則水藩別封、祖先所仕、且君侯好学不耻下問、有賢々之誼、又感而応之、甲辰三月、自京師来江府、将到邸、儀違和、興疾而入、病四五日、四月廿四日歿、年六十三、葬于小石川無量院、威奥田氏、生二子、女阿菊、年十三、男久吾、再六歳、銘曰、博於物、

遊於芸、威而起、老而□。賢人噫在龍蔵、噫命哉溢然逝、

孝子　久吾嘗
友人　某識

△先生との関係それからわしと先生との関係に付てお話しをしよう、蔵六家は初代からチャンと今も現に引続て居りますが、わしの叔父が篆刻の上から蔵六伝を襲だことになつたものだから、この叔父の遺言に依りて先生の祭は絶えずわしが遣つて居ります、維新の際に、大阪へ参りたり、静岡へ参りたりしましたが、これ丈けは欠したことはないのです、既に申上げた通り、百年祭も盛に行ひましたが、それを先年御国の鴨江とか申す人が発起して先生の碑を建てると云ふて一時騒ぎましたが、その建碑費募集帳に大阪の人で、玉江とか云ふ人が先生が死して百年の後最早誰れも祭りをするものがないと書かれましたが、わしが今日に至る叔父の遺命でチャンとかくも祭をつめて居るのを知らぬ、見聞の狭にも困る其時に先生の印譜をも出版して配りました程で、この時の印譜の序文をご覧下さればそれでわしと先生の関係はよつく分ります

印学之伝于我久矣、而其能大成之者　芙蓉高先生也、先生伝之橘君樹、君樹伝之子康徳、康徳伝之羲子収、子収即叔父也　余幼学于叔父、叔父嘗出一印冊曰、此雖僅々小冊、芙蓉先生得心底手之妙、具在于此、汝由此而学、自加勉励、則必有得焉、毎歳春秋、於余拝先生之墓、一日詣墓碣、語余曰、此係王父君樹手刻、有故不行建、殆三十年終不遂志而歿、至先考時、羽倉太沖之戮力、始得成其遺志、願先生壮年、家于京師、従学者患多皆在京畿関西、是王父之所以独此挙也、先生逝後、未聞有東都人得其刀代収其遺篆者、実為可憾、予欲彙輯伝于世、未果也、汝宜継吾志、慎勿忘、遺言猶在耳、而叔父之墓木亦已拱参、今茲癸巳四月廿四日、当先生一百年之忌辰、乃就諸同好蒐輯遺篆、併余我収蔵者、作此譜、蓋所以成叔父之志、而先生地下之霊、亦冀可以慰也

明治癸未三月上院　　敬所中井兼之識

（むざん生）

⑧「高芙蓉（八）」　明治三十三年七月六日

△一心院の寿蔵碑次手に墓の事に付て、も一ツ申しましょう、先生の記録に寿蔵碑を京都の一心院に建てたと云ふことがあるから、是非これを調べてみたいと思ふて京都へ参る度毎に尋ねてみたが、知れぬ、それで京都の知人へは誰れにも彼れにも頼んで居ゐたが、一向に知れぬ、それでも記録にあるのだから間違もなかろうと云ふ考で、たしか二十八年かと思ひますが、出京した時、此度は幾日かゝつても其調べを附けなけりや置かんと云ふ大勇気を鼓して手を着けてみた、この一心院と云ふは知恩院から向ふに当りて高燥の地があるこれを上り詰めた処が円光廟である、それを右の方に折れて行つた所が其一心院である、寺の住職に面会して尋ねても矢張いつもの通りである、過去帳を調べてみましようかと云はれたが、遺骨を埋めた処でないから過去帳にあるわけはないと云ふに、住職は取調べてくれたが、分ろう筈がないのだ、寺には何にも取調の手掛りがないと云ふから、然らば墓を一ツ〳〵調べようとて墓所に這りて天明年代のことだから、何でも天明風の墓を見付けるのが肝要だと考へて、彼れか此れか捜し始めて、が更らにこれと思ふものさえ見出すことが出来ぬ、もう殆んど見当が付かなくなつた、それでも知れぬ、所詮ダメかと落胆した、いえくどうしてもこゝになくてはならぬと、強情にも又捜し掛けて処、唯其中に無銘の墓が一基ある、元の墓道とも思はれる処は絶塞がりて其墓の一方は、高く立派な石垣が積み立てられた壮大の墓地に圧倒されて居て、此方は殆んど見るべくもない姿だ、これは誰れの墓かと問へば、糸屋の鈴木と申す人の墓だと云ふ、兎にも角にも、無銘とは不思議だ、一方には何んとか誌があるかしらんと考へ、首を突込んで見た、が文字があつた、「芙蓉居士墓」と刻んである、しかも、先生の自筆らしい、アゝ嬉しやと飛立た、今思ふても其時の嬉さは別であつた、すぐ引取りて鳩居堂に話した、鳩居堂はそれなら鉄斎に話して悦ばせようとて同道して知らせに行つた、これも狂奔の姿で貳人を率連れて発見の墓地へ行つて見た、直様石工を呼んで其墓碑を後前と振換えさせた、そうすれば立派の墓道に面するのだ、これ等の人々も十数年来捜しに捜した揚句、どうせ分らぬ事に定め居つた連中だものださ、それを今突然発見したのだから、其時久々逢はなかつた父母にでも面会した心持だ、と覚えず異口同音に発した、住職にも懇々保護のことを頼んで一同立戻つた事がありました、この寿蔵碑は先生が京都から江戸に出てくる時に建てたものらしい、それで先生が歿した時、遺言せられて所持の印だの衣服だのは、此碑下に埋めさせたとのことである

△先生の病気　京都から江戸へ帰られた時道中で不幸にも病気に取付かれたそうだ、其病名は当時駕籠風と云はれたそうだ、今のインフルエンザのようなものであつたろうよ。

（むざん生）

⑨「高美蓉（九）」　明治三十三年七月七日

△高梨の地先生の出生地に就ては、いづれの記録にも甲州高梨と書いてあります、墓誌、墓碣とも甚の通りで、かの先哲善談続編なども同様であります、が今聞く処に依れば、御国には高梨と云ふ処は見当らぬそうだ、それで先年からわしも御国へ行く度毎取調べました、中島錫胤サンが御国の知事をして居た時にも、田沼建サンが知事の時にも此取調は絶えず頼んでみましたが、一向に判然とした事が分らぬです、それであるから種々臆説も出まして、或は山梨の間違いだと申すものもあるし、或は高は甲のことだろうなど云ふものがありますが、これは皆な取るに足らぬ説でござります、先生の印には正に高美蓉とも、高蓉とも刻んだものがあります、又高梨の間違いでないのも確としたる證據もあります、あの墓碣と墓誌とを読んで見れば、先生が王父流落して甲州に参つたようでありますが、これは書き方がわるいからである、先生は祖先から純然たる甲州人で、王父も免職されて其生国に引取つたのみである、これも證據が明白であります、これは先生が自筆の手紙で、今も雲州に遊て居るのです、先年わしの門人が特に写して寄せられたものがあります、これを一見すれば、高梨の地名が御国に在ることも、祖先から甲州人であることもよつく分るのです、

「前は略す」僕姓名変候事元来大島源姓に御座候祖父水戸西山侯之時大島宇左衛門と申者にて当府に相務罷在候此者累世甲斐高梨と申す所に居住仕候依之僕高を称用罷在候然る所旧年鳥丸侍従殿へ招かれ出勤仕候僕広橋大納言殿へ立入仕候依之本氏に復し姓は源に御座候得共本国居所高梨にて富岳峰直に簷に見へ申候故僕書記仕候は依舊高を称し名孟彪字緝皮号菌菖居申皆々如旧にタゞ孟字を用迄違申候通呼大島と変候迄に御座候

三月十一日　　大島逸記

桃子深先生　　孟　彪

これは何によりの証據で、凡ての臆説を打消すことが出来るのです、併し今にいたる此高梨の地か分らぬは大遺憾です、先生の多くのことは大概取調が付きましたが、これ丈がまだ不明になりておるのです、どうかお帰りになつたらこの取調を願いたいのです、大概村名ではなく小名かなどにありはせまいかと思います、この事を取調べるには父尤軒の事を取調べるが必要と思ふのです、どうか頼みますよ、

△幼年時代は其郷党の坊サンに就て学んだものとか伝へます、十六七まで郷里に潜んで居られたもの、ようです、医者がイヤサに出奔して京都へ出たものです、国を出る時には余程漢学は進んで居たようです、それで此のち再度甲州へ立戻つたことがあるやいなは判然しませんが、父母があつたから或は帰省したこともありましたろうがそれ等はよく分りませんな。

（むざん生）

⑩「高美蓉（十）」　明治三十三年七月十五日

△尊王家国から飛出て京都に行つてから坊城家に就て学んだ、其学んだ所は何であるかと云へば、典故を習ひ朝儀のことを学んだのだ、されど能く其旨とすることを究むれば、其大体の本意をば窺ふことが出来るのだ、有名の高山彦九郎と親密の間柄であつた、事から尚高山が祖先を祭ることに付て骨折をせられた事などに照らし合はせて見れば、それでよく其志を見らるゝであろう、それで其親密のことゝ其他のことなどがよく分るのは、左る出処があるのです、

△高山日記と云ふ彦九郎自筆の日記がありますが、それに先生との関係が書たことがあるのです、

余が寓居大嶋云々

美蓉の室人幼児等と打連れて境町の門を入り云々

これで見れば、誰れも知る高山が三条大橋の上で土下座をきり、泣て皇城を拝したと云ふ事蹟も、即ち此時分のことで先生の処に寄食して居た時のことである、此日記中にはまだいろ〳〵先生との関係を記してもある、

△神社の名残と云ふものがある、これは或る尊き所の秘書であるが、伝手を得て拝見した事がある、それの巻五、第九帳に「願書来由」として先生が高山願主の其祖考高山伝左衛門平兼を神道の礼を以て祭祝せんことの願書を取次がれた、此願書を吉田二位様御内鈴鹿石見様へ取次だ、先生は此願書に取次として署名せられて居る、これは唯親王の後裔だと云ふことのみで神道祭のことに尽力したのだ、それでとう〳〵御宣下となりて高山の祖考は伊賀鎮霊神となつた

これは、先生の力が多いから此好結果を収め得たのだ、尊王心の篤いことはこれからでもよく見えるのだ、当時先生は京都の衣棚竹屋町下れ処に居住せられたと見える此願書にもそう書てある、これでくどく申す先生の志の存する処は大概推する事が出来るのだ、そこで先生は京都の外、

△伊勢出雲へも出掛けて永らく滞留して居たらしい、伊勢は山田で其頃棒屋と云ふ宿屋に投せられたが、宿の主人が其道のすき者であつた、先生の為め特に一室を構えてこれに菌菖居と名づけて住まはされて居たそうだ、それで先年山

田へ參りた時この棒屋と云ふものを尋ねましたが、其子孫があるとは云ひましたが、余程零落して居たらしく、一寸分り悪くあつた為め尋ねなかつた、出雲には門人もあつてあの桃先生などは頗る親密を結ばれて居たようすであるそれであるから此国には先生のことも割合多く伝はつて居る、そこで

△先生の本領　に付て少しくお咄しをいたそうか、前も申した如く、先哲叢談統篇には随分先生のことを書てありますが、坂本で沢山と世に行はれてあるものだからご寛でしようか、これにもこうありましよう、

芙蓉刻意説文、傍通六書、尤精音韻、又有篆刻之嗜、疾以鉄筆技、喧噪一時、其経術文章、為末技所掩、知其為人者極衆矣、

この説は至極の同感である、わしが取調べた結果もこの通りである、世には此類の事が多いもので、独り先生ばかりでもない、まゝ其本領とする所が余技の為め名声を剥奪されてトンだ評判を取り終するものがある、小野湖山翁なども元来詩人で名を博する積りではないのだ、それがとう〳〵詩人の湖山で終つて仕舞ふた、先生も事体は儒者を以て世に立ことが其大本望であつたが然るを意外のことで名家となつて仕舞た、甚だ残念の事であつたろうと思ふ。

（むざん生）

⑪「高芙蓉（十一）」　明治三十三年八月一日

△先生の行状に付て申そうが、かの墓誌銘の楽貧耽学と云ふが簡単でよく言ひ尽して居る、尚先哲美談にも其大略は見えて居るが、先生の真面目は却て随筆の方面から見た方が、歴々とよく其人物が分る、これ先生のみならずだ、凡ての人物がそうである、そこで左の記録の如きはよく先生の平生を写し出したものだ、その他の行状はこれで窺ひ知ることが出来るのだ、これが果して此時代の逸士の風と云ふものかどうかは知らぬが、其人物が現に躍々活動して今日われ〳〵の眼に映し来るのは却て随筆ものゝ力だ、ごらんなさい、中々面白しき節があることよ、

君義先生坐臥記摘抄

芙蓉山人は生得偽気のなき人也、真の雅人と云ふべし、故に家産落魄たり、好事故に一金あえば珍書を求め一金あれば珍器を買ふ万金を贈れるとて富べき理なし、嘗て近隣の人勧めて云、先生一日に石印二顆つゝ刻せられんは二三年の内に産業立べし我支配して経費を給すべし日々石印二顆を刻して我に渡されよと云、芙蓉其厚意を謝して日々二印を刻せり、末一月に満たずして隣人に謂て云、我珍書を見当れり再離得請三金を呉れよと、隣人云一日二顆小大ならして銀二両也、一月に三百円に満たず是を以て夫婦と女子と下女と四人衣食を給して又少し貯を余す心也、然に末一月ならざるに百八十円を出さば月費足らざるべし、然れども此度は難得珍書とあれば止むを得ず金を出すべし重ねてはならざること也と云、其後は日課も怠りて度々珍書奇物を購はんと請ふ、隣人拒めとも聴かず日久しく俗人に役せられたりと因て又た其支配を取返せり、

又嘗て十二月二十九日に余が僑居に来たりて寛話せり、余心に怪しむ、常に来訪せぬ人なるに何に因て除歳の日に来れるやと、後に柴野彦助先生に物語せり、彦助曰、歳暮には掛取と云俗物来れり故に家事を婦人に托して我身は閑人に就て俗を避る也、書生も掛□あり、足下は館主人に任して金銀を手に付ぬ人故に足下の方へ来たる也、足下の僑居を出てより外に往所なき故に、大裏四ッ辻に立て日を暮せり、其処を藤野淑蔵通りかゝりて問て曰、芙蓉事此寒風に何故に大道中に佇立せるやと云は、芙蓉曰、従三位の拝賀の服は何なるやと考るに思得す足下覚たりやと云、淑蔵近頃来て我に語れりと彦助の物語也、甚しき俗事のきらひなり、

又嘗四條の芝居前にて友人と相逢て道にて談せり、其時巾着切間を伺て芙蓉か印籠巾着を切取れり、開て見れば篆書小本、蔵印小冊、蝋石印か蝋基類見剔ぬ物ばかりあり、巾着切想ふに惣髪にて短刀二本挿、羽織袴を着せり、何者なるかは知らねども疑らくは方術の人ならん、若不動のからしはり類の苦を受んも知るべからずとて、追て祇園の前にて印籠、巾着を返し罪を謝せりと也

（むざん生）

⑫「高芙蓉（十二）」　明治三十三年八月二日

△先生の行状（つゞき）

君義先生坐臥記掲抄

又堂上某々の媒となりて婚を結べり其結幣の日を期して婦家へ通達せらるゝに芙蓉を召して命ぜられたり、芙蓉敬諾す、帰路友人の許に立寄りて曰、某々の結幣の期何日と定れり足下媛家の雑掌に逢はれたれば伝言を頼むと云、友人同某公の婚礼の事なれば至て重きこと也、伝言にては済まぬ也と云、芙蓉頭を振て云、此節は書画の鑑定にて甚多用也、期日を間違なく達せば済ゐなんに、是はやかましきこと也、と云て去る、又或時暑気見舞の為め大雅道人の許に往くに伊勢の町人の弱隠居に韓大年と云人あり是も大雅が所々て往会たり、語頭富士山に及べり、三人の者俄に攀登の心起れり、因て大雅破れ畳の間より包たる銀を取出して路費に当つ、大年僕を召連たり是に命じて草鞋を買はしめ即刻出

立せり、芙蓉一通の書を認めて大雅が要に属して曰、便あらば此書を我が家へ送られよと大雅が妻許諾せり、然れども忘れて達せず芙蓉が家内芙蓉が帰らざるに因て諸方を尋て大雅が許にて書を得て始て富嶽に登りたることを知れり芙蓉為ることに此類多し、此に略す、芙蓉の如き寡欲の人は今に稀也、慕ふ所なり、此君義と云ふは、即ちかの桃先生のことである、

△書画先生は書も画も却々の名人であるがこれは割合によく知つて居る人が寡ぬ、先哲美談にも、

芙蓉好為書画、当其下筆時、意匠経営、不在於形跡、而在於運筆、細大疎密、亦性意之所適、

とあるにても分る、ご覧なさいよ、この書と画とをとて、一幅づゝを取出されて示されたが、素人眼にはよく見分けが附かぬが書は篆刻の上から妙手であるだろうとのことは承知して居るが、画に至りてはどうかと思ふて居たが、其風俗を脱してずつと気韻の高潔な処は専門の画人も或は企て及び難い処があると思ふた、

此時翁の門人田口それと云ふ俗気のたつぷりとした人が入り来つた、昨今翁が七十の寿宴に代えて印行さるゝと云ふ菌萕居印粋に付て相談に来たのである、頼んで居た序文がまだ重野成斎から届かぬかとの心配相談であつた、何にか咄しの内に成斎が尋ねて来られた、注文の序文を持参して来られた、懐中から序文を差出したら、翁も門人も喜んでこれでやつと印行に間に合ふとて恐悦した、成斎は直ぐ立ち去られたが、又入代りに此程なくなられた杉浦楳渾の孫それが来られた、祖父が所用印の鑑定を乞はれに来たのだ、咄しはこれで一時途絶えたが、又も芙蓉の事に立戻つた、

△売茶翁の硯とて立派の箱入ものを取出されて見せた、この硯は先生の彫刻であるこの彫はなんと見事ではござりませんか予売茶翁の持物であつたのをつひわしが手に遣りましたのだ、

△菌萕居印譜と肖像前に申した其叔父から貰ふたと云ふ先生の印譜はこれでござるこの口絵の肖像は応挙の筆であるが、この真物は今あるかどうか知れぬと云はれたが此程蕉雨氏から送られた肖像も確かにこれと一ツである、元はと云へばこれから出たのか知らん、彼れも鉄斎の模したものであるが、寸分の違ゐもない、唯彼れには摶方之余と見えたが、これには博古之余とあるこれが丁度らしい、

（むざん生）

## ⑬「高芙蓉（十三）」明治三十三年八月三日

△内室おらいの方先生の内室は巧みに書画をかゝれた人である、其事は先哲美談にも見えて居る、雅名は莱禽と云はれた、君義の坐臥記にもこう記してある、

其妻は伊藤忠蔵先生の下女なり書画を能するに因て忠蔵先生に請て娘分にて娶れり是又雅人也名を莱禽と云平日「おらい」と呼ぶ

△男女子久吾は田舎え引込んだらしい、田舎は即ち母方の郷里へ行たらしい、が其後はどうなつて居るか分らぬ、阿菊の後もよくは知れぬようだ、これから先生の

△交遊諸士に付てお咄しをいたそうか、墓碣に記してある人々はこれを除こう、その他はいづれも当時の大家揃である、柴野栗山、皆川淇園、柳里恭、円山応挙等を初めとし、苟くも文雅の道に志た知名の人々とは交際を結んで居たらしい、応挙などは大抵先生の手に成つた印を用ゐられて居た又栗山も同様であつた、これに付て面白い咄しがある、これは行状の中に入るものであろう、栗山から先生に頼んだ印があつた幾日たつても却々出来せぬ、度々催促をせられたが例もまだ〳〵と云ふ、どうも捗る工合が見えぬのだ、今日は是非と云ふて人を遣つて見たが例のまだ〳〵で使は返された、栗山たまたず、自ら出馬して行つた、が先生は不在だ、内室丈け居るそうでござる、わしの注文の印は、と尋ねたら、サヨー一ッ今日も刻りました、が気に入らぬとて何処かへ投付けてフイと出掛けました、それは何処へ投げたかと問ふたら、縁の下の辺でござりましょう、此処でしようかとて、内室が煤だらけの中から拾い上げた、栗山見て感心の体である、これは中々立派のものだ、これなら十分だ、わしが貰ふて行つたとそう伝へてくれと行つて遁つて仕舞ふたそれから、栗山の用ゐた印は概ね此印を用ゐたそうだ、どうも段々技量が進めば進むに随つて当人にも気に入らぬだらけと見える、人から見れば粒々の仕上げと思ふてくれても、本人の眼からではどうも気に入らぬ、先生如き腕になつては、迚も気に入りてア、これでは十二分と思ふようなものが出来る筈がない、わし等でもまゝこのような事があるから、尚しかそう思はれるのだ、わしも存生中に、是非先生の事蹟を編集しようと思ふて先年から取調べたことはこの通り積んで小冊子ほどありますから、

△芙蓉先生遺芳録とでもして板行しておきたいと思ひます、がまだその運に到りませんが、どうかそうしたいと思ひます、此外先生の事は沢山お咄しがありますが、マーこゝらで置きましようよ、孰れまたの折尚お尋を受けましようと云はれ、それから翁自身の事に移つた、わしは当年とりて七十二になりますか

ら、何にか寿要をとも思ひましたが、門人共がそれよりは印譜を印行するがよかろうとの事で、昨今その準備中なのです、これも一応はご覧おきをたのむとの事で此度印行せんする翁の印譜即ち菌舊居印粋二冊を示された、それに翁の履歴が載てあつた、これは其一部を頂戴して他日に紹介したいと云へば、翁も快く諾せられぬ、是れ翁を訪問したのは午前十一時頃で緩々物語を承り、甚だ長座をして厄介をうけたから、くれ〴〵礼云ふて帰途に上つた、てうど午後四時に近かい頃であつた、幾

（むざん生）

⑭「高芙蓉（十四）」明治三十三年八月十日

これから芙蓉の詩文等を掲げて完結にしようと思ふたが、余り回数が重なるからこゝらで筆をとめることにしよう、孰れ他日を期して更らに一冊子に改めて諸君の一瞥を煩はす時もあろう、そこで諸君□謝すことがある、生の筆はとんと蚯蚓の委蛇ようで読め読め難いとこが多ひ、それで活版部の文選方などからは時々苦情を耳にせぬから、つひ増長して一層蚯蚓を引張つたので、誤植だの、脱漏だのが甚だ多い、校正方も原書に引合せても矢張り読め苦いと来て居るから、ソコらは大概に遣り付けたらしい、今更これが正誤をしたならば、一段半位即ち一回丈け慥かにあるらしいが、これは寛大なる諸君が疾く其節に於てこれは誤りだろう、これは脱字があるだろうと、深く推諒を賜ひ筆者の意のまゝに読過して呉れたろうと思ふから、四角四面に改めて今更正誤などせぬことに極めた、どうかこれを諒して貰いたいのだ、それで前に述べた如く、このお詫は他日の冊子に於て、十分に其埋塡合をする考である、今筆を擱くに臨みて、一寸申上げておこう、

羽倉潮、を可亭と書たがこれは聞誤りである、印人の可亭と思違えて話しをされて人があつたから、つい誤られたのだ、印人羽倉は明治二十七八年比年齢八十五六歳にして没去せられて芙蓉建碑の頃は幾かに二三歳の孩兒であつたから、芙蓉台石の羽倉は其当時の代官職として名も知れて居つた、羽倉権九郎及羽倉外記の一族であつたろうか、或は用水先生のことであつたろうとの事である、△高梨の地幾程を経て後ち中井翁から高梨の地に付てこう云ふて来た、参考の為めにもと心得こゝに記しておこう、

此程不忍長酡亭に時て薄井翁（龍之）に会し酒間高梨の地名に及び候処、翁の云ふよう、武田家の勇将に高梨某ありこの人正史には見えざれ共野史にはこれあり候也、或は高梨某の居住の所を当時里人の高梨と唱へ候事には無之哉云々と語られ候、愚考にも中巨摩郡南湖村に十郎道或は十郎と唱ふる処あり、往昔奈胡十郎居城の往還と申事也、もし高梨も此類ならずや一応申上候、

或人が云ふには、中巨摩郡芦安村に名取村と云ふのがあつた、其傍に高梨と云ふトコがあつたとの事たが、甲斐国史にはトント其名が見えぬ、ある本に芙蓉は名取村の人と書てあるそうだが、この名取村と云ふ村名も、或人の咄し計りで地誌には見当らぬ或は又甲府緑町に高芙蓉屋敷と云ふ処があるとも伝へるが、これも判然としては居ぬようで、多くの知人にも問ふたが、新聞にも広告を出しても見たが、この高梨の地は果してこゝであつたと云ふことが見当らぬ甚だ以て残念でならぬ、

次手に紹介しておこう、中井翁の行録をもこれは略歴に過ぎないが、菌舊居印粋を出版せらるに付きて、門人の書れたものである、原文は漢文だが分り悪いから仮名文に訳して、それで語路の善くない処もあるのだ、

敬所中井先生行録

先生は名は兼之、字資同、敬所と号す、初字資二郎、江戸市の人、森江君諱は兼行の第三子なり、天保二年六月廿五日生る、出てゝ幕府御飾師棟梁中井肥後諱は由路の嗣となる、更らに下野と称す、中井氏の系は武内大臣の子巨勢小柄宿禰に出づ、子孫或は顕はれ或は隠れ、十四世の租正吉、大和の中谷に隠る、宅の傍ら井を鑿つ、水極めて清冽、土人中井と称す、遂に以て氏と為す寛永中幕府日光廟を営み、正吉の子清次を徴し御飾師棟梁と為す、子孫其職を世々し肥後君に至りて機略あり、家声益々揚がる嘗て命を奉りて始めて洋式小銃七千余口を鋳る、前後労を積み、宅地及俸米を賜はる世禄の士に准せらる、蓋し異数と云ふ、

（むざん生）

⑮「高芙蓉（十五）」「完」明治三十三年八月十一日

敬所中井先生行録（つゞき）

先生其の後を承け、心を職事に潜め、博く群書に渉り、錬金の法を講じ、又自ら鎔冶の事に任す、撥蝋翻砂の二法を究む、王政維新、其の世職を解き、先生父祖の世恩遇を蒙るを思ふや、徳川公に封地に従ふを請ひて、許さる、特に藩士に准し、静岡に徒る、是時偶清人程固卜の書する所菌舊居の三字を得、因て其居に名く、藩廃せられ、東京に帰る、再び下谷茅町の旧廬に居る、廬不忍池に面す、夏秋の交、清風徐ろに来る、芙蓉香を送る、是に於て菌舊居の名始めて称ふ、先生幼にして鉄筆を好み、外叔濱村蔵六に従ひ、篆刻を学ぶ、蔵六歿す、門人等先生を推し権りに其業を継ぐ、時に年甫めて十三、其の穎異衆に超

ゆるを見るべし、然れども先生自ら足れりとせず、更に益田遇所に従ひ、刻苦愈よ勤め、初め明の蘇嘯氏の篆法を慕ふ、某藩蘇氏の印略を蔵するを聞き、一たびこれを見んと欲す、藩法外人の観を許さず、乃ち其の藩士某に就き、権りに曝書の手補と為り、以て其館に入るを得、影写数日、頗る雅意を領す、既にして謂ふ、蘇氏亦漢印に出づるなりと乃ち専ら漢印を模し、博く明清諸家に渉り而して自ら一機軸を出だす、是を以て八面変化、愈よ出で、愈よ妙、嘗て幕府の命を奉じ、国璽を刻するもの数、又内旨を奉じ品玉御璽三顆を刻す、毎に賞賜あり、名声四方に馳す、索印者の履常に門に満つ、王侯将相より以て文人大家に及ぶ、先生の篆を得ざれば以て辱と為すに至る、毎に清国欽差大臣の来る、必らず先づ使を先生の門に馳せ、以て其篆を索む、最も梨堂相公の寵遇を受け、其封鴎荘印賞者は、即ち先生の審定する所なり、先生博く印籍に通じ、貴顕の秘、名家の蔵、観ざる所なく、観れば必らず其の要を録し、以て考証に備ふ、五山居士郷君、先生をして其の著はす所の印譜考略を評定せしむ、先生曾て頼古堂印人伝の謄本を獲、校讐再四、其の誤りを訂し、印行以て同好に頒ち、又飛鴻堂印人伝の舶齎斎せざるを慨し、群書に散見するものを輯め、清朝印人伝を編し、以て板に鏤せんとす、偶濱村大瀞来訪ふ、談印人伝に及ぶ、乃ち稿本を出だし以てこれに与ふ、大瀞これに拠りて晩悔堂印譜を著はすと云ふ、明治二十三年内国勧業博覧会を開く、先生に命じて審査官と為す、会畢り銀杯一個を賜ふて其功を奏す、二十五年米国博覧会あり、先生帝国博覧会の命を受け、水品印三顆を刻し、会場の列品に充つ、先生又金石書画の鑑識に精し、嘗て臨時全国賚物取調局鑑査掛に補せられ、東北諸県を巡し、審査する所多し、先生性謹勅、最も師友に厚く、大嶋芙蓉の墓、小石川無量院に、在り、先生其の印学の祖たるを以て、歳時必らず展拝し、僧に請ふて誦経せしむ、老に至りて廃せず、人或は語るに小故を以てす、先生これを愛ひ、身其の厄に当るもの、如し、其の結局を聞かざれば、則ち安んぜず、人と為り、瘠せて癯す、身衣に勝えざるが如し、然れども其の端坐刀を把るに方りては、則ち全身気満ち、双腕勢張り、凛乎犯す可らず、何雪漁の所謂対篆は対墨の如し、臨刻は臨陣の如しとは、先生に於て乎これを見る、其の刻する所、筆力勁健豪放なるもの、蓋しこれを此に得、或は時に飲酒酣酔、乃ち絃に倚り朗声俚曲を歌ふ其の瀟落又此の如し、其の刻する、洗練綺麗なるもの、蓋しこれを此に得、人唯先生の印を善くするを知りて、其の他を知るなし、先生亦自ら言はず、然れども談熟し興到るに及んでは、則ち或は書画を評し、或は冶金を論ず、皆な確として憑拠あり、是を以て交は愈よ深く、而して人は愈よ服す近時目疾を患ひ、多く印を作らず、然れども人風流韻事を問ふもの、常に座に満つ、先生これに対して応答倦容なし、以て其の老て精神の衰へざるを見るべし、配中井氏三女を生み没す、復た娶らず、三女皆な他に適く、今茲先生年方に七十、門人等相謀り、其の刻する所を集めて印譜を作らんと欲す、某少きより教を門下に受け、先生の平生を審にす、因て行録を作る此の如し、

明治三十三年六月十一日、

（むざん生）

## 五、おわりに

本稿は、高芙蓉研究にとって重要な文献を提示した。特に峡中日報社発行の新聞『峡中日報』の全文を示した。また芙蓉のこれまでの研究の成果と今後の展望について指摘し、芙蓉研究の問題点がどこに存在するかについて提示した。つまり高芙蓉に関する基礎研究である。芙蓉のみならず、まだ邦人の篆刻家の資料や文献は完備されていなく、諸機関に散在しているのが現状である。芙蓉の作品も分散して存在し、基礎資料の集成が待たれる。芙蓉の顕彰活動も一層の推進が望まれよう。京都で開催された第四回の百七十年忌の折、須羽水雅は梅舒適先生に、「私がもしも寿あつて二百年忌に当る歳迄生き得られるなれば二百年忌を今より一層盛大にし、今より一層芙蓉に関した色々な事を補足、新らしい事の研究をも発表出来得るだろう。」と語られたと言う。私たちは、先人の思いを継承していく事が大切であろう。近年、後藤憲二編になる『邦人印譜目録』（『日本書誌学体系』前掲）が刊行された事は特筆したい。

高芙蓉の深い学殖とすぐれた芸術は、今後も尊敬を集めて行く事であろう。微力ながら順次調査を進め、芙蓉の実証的研究を進めたい。芙蓉をめぐる交游関係、池大雅や韓天寿など文人墨客との文雅の交わりにも言及したい。

まさに江戸の文芸は文人研究の宝庫である。儒学の教養を背景に、

旅を好み、詩を詠み、書や絵を嗜んだ彼等の文人趣味に、江戸の風流に、限りない興趣を覚える。ただ江戸から明治時代の資料の早急なる保存の手を講じないと、大切な文化遺産が消滅してしまう恐れがあろう。先人の文化を次世に受け継ぐ企てを切に願うものである。

本稿執筆にあたり、九州大学名誉教授中野三敏先生、東京国立博物館並びに山梨県立図書館にはご教示、ご便宜を頂いた。記して謝意を申し上げる。

注

1、高芙蓉は、まだ当時舶載された僅かの印譜でしか知られていなかった秦漢印に着目し、類稀なる識見と篆刻技法のもと復古を提唱した。中井敬所は芙蓉が着目した古印の研究を更に押しすすめ発展させた印人である。敬所は高芙蓉の事蹟を研究調査するために、あらゆる人脈を駆使して全国の印人や篤志家に呼び掛け芙蓉関連の資料を蒐集した。この資料により当時の芙蓉研究の全貌が分かる。彼の印学は芙蓉研究と同様に決して独りよがりなものではなく、自身蒐集した印章や印譜に基づいたもので、実に精緻なものとなっている。

更に篆刻の技法面においては、敬所が芙蓉から受け継いだ最大のものは、復古精神により篆刻の正風を打ち立てるということであった。彼の作品は、いささか厳格さのあまり日本人の目には窮屈さを感じるようである。しかしこれは、やはり印の本道であろう。確かに日本には日本人の感性による印趣もある。つまり篆刻には、徽派的な整斉な刻風と、より自在な刻風の印がある。芙蓉の篆刻はこの両面が見られ、芙蓉の刻風の幅広さが知れる。芙蓉の篆刻の謹厳な面は敬所に、飄逸な面は山田寒山に継承されているとも言えよう。

2、「日本印人研究―明治・大正期新聞資料における山田寒山関連記事見出し一覧稿―」（『国語国文研究と教育』第四三号）をかつて執筆したが、筆者蔵の寒山関連の新聞複写は元来の形は留めているが、不鮮明な箇所が見られ、平成十九年九月に山田家蔵原本との照合をした。これは、いずれ完全を期し提示したい。

3、同課題と併せて、これまであまり高く評価されることのなかった「近体派」の研究を進めている。「近体派」は、装飾的で俗悪な刻風であるというのが従来の評価だが、華麗な刻風の中に日本的な「雅」の美を見出せる。

また、篆刻家と称される人達は、元来儒家や文人・学者であり、詩文そして絵画や書をよくした。日本印人の研究は、篆刻の面のみではなく、これらと総合的に研究されるべきであろう。

4、わが国における印人伝の最初の編纂は、文化文政の頃、永根伍石により行われた。しかし、現在では佚して伝わらない。『日本印人伝』は、中井敬所の未完の稿本を、敬所の七回忌である大正四年（一九一五年）に、女婿新家孝正の手により上梓されたものである。校正にあたったのは姪の石川文荘と門人の岡村梅軒を中心とする六人である。本書は未定稿であるものの、わが国印人伝の唯一の著述であり価値あるものといえる。同著は『日本の篆刻』（二玄社）に水田紀久先生による訓読校注が掲載されている。さらに『続補日本印人伝』の増訂がある。

5、拙著『高芙蓉の篆刻』（木耳社、一九八八年六月）、拙稿「高芙蓉の顕彰と墓碑について」（『全国大学書道学会紀要』、全国大学書道学会、二〇〇五年三月）

（じんの・ゆうじ　熊本大学教育学部准教授）